

専門家に聞きました

気象の変化に対応できる
普段からの心構えを持つことが重要です

岐阜地方気象台 防災業務課 防災気象官 大洲光知夫さん

最近の降雨傾向としては、年間降水量は長期的に見ると少なくなってきているようです。しかし、1時間に100ミリなど、短時間の猛烈な雨については増加傾向で、地球温暖化や都市部のヒートアイランド現象などによって、今後ますます増えるのではないかと懸念されております。

災害の傾向としては、地面がアスファルトやコンクリートで覆われてきている所が増えて、短時間に強く降った雨が地面に染み込まず、河川に流入し、急激に増水してはならんするなどの被害が増加してきています。

注意報、警報の発表については、基本的には各基準に達するを予想される、注意報については12時間前、警報については



▲大洲さんは、主に防災気象情報の作成・伝達を行っています。

は6時間前にそれぞれ発表するようにしています。しかし、夏季の雷雲が急速に発生、発達する場合、直前の注意報、警報の発表もありますので、気象台発表の防災気象情報には十分注意してください。

重大な災害が発生すると予想されるときに警報を発表しますが、さらに、土壌雨量指数を利用した土砂災害の予測手法により、危険な地域(市町村)を限定して、警報の切り替えを行う場合があります。例えば、「美濃加茂市付近では過去数年で最も土砂災害の危険性が高くなっています」などの文言で警戒を呼びかけますが、このような警報が発表されたときは、土砂災害の危険区域などに指定されている地域の人は、避難が必要になってきます。

災害から自分の身をを守るためには、住んでいる地域が、浸水やがけ崩れなどの危険な地域なのか、常日ごろから認識しておく必要があります。自分の住んでいるところは大丈夫だろうという感覚は捨て、気象の変化に対応できる普段からの心構えを持つことが重要です。

雨の強さと降り方 (気象庁提供)

(平成12年8月作成)
(平成14年1月一部改正)

1時間降雨量 (ミリ)	予報用語	人の受けるイメージ	人への影響	屋内 (木造住宅を想定)	屋外の様子	車に乗っていて	災害発生状況
10以上 20未満	やや強い雨	ザーザーと降る	地面からの跳ね返りで足元がぬれる	雨の音で話し声が良く聞き取れない	地面一面に水たまりができる		この程度の雨でも長く続く時は注意が必要
20以上 30未満	強い雨	どしゃ降り				ワイパーを速くしても見づらい	側溝や下水、小さな川があふれ、小規模のがけ崩れが始まる
30以上 50未満	激しい雨	バケツをひっくり返したように降る	傘をさしていてもぬれる		道路が川のようになる	高速走行時、車輪と路面の間に水膜が生じブレーキが利かなくなる	山崩れ・がけ崩れが起きやすくなり、危険地帯では避難の準備が必要 都市部では、下水管から雨水があふれる
50以上 80未満	非常に激しい雨	滝のように降る (ゴーゴーと降り続く)	傘は全く役に立たなくなる	寝ている人の半数くらいが雨に気がつく	水しぶきであたり一面が白っぽくなり、視界が悪くなる	車の運転は危険	都市部では地下室や地下街に雨水が流れ込む場合がある マンホールから水が噴出する 土石流が起こりやすい 多くの災害が発生する
80以上	猛烈な雨	息苦しくなるような圧迫感がある 恐怖を感じる					雨による大規模な災害の発生するおそれが強く、 嚴重な警戒が必要

- 注1 表はこの強さの雨が1時間降り続いたと仮定した場合の目安を示しています。この表を使用される際は、以下の点にご注意ください。実際に降った雨量が同じであっても、降り始めからの総雨量の違いや、地形や地質などの違いによって被害の様子は異なることがあります。この表では、ある雨量が観測された際に通常発生する現象や被害を記述していますので、これより大きな被害が発生したり、逆に小さな被害にとどまる場合もあります。
- 注2 「強い雨」や「激しい雨」以上の雨が降ると予想されるときは、大雨注意報や大雨警報を発表して注意や警戒を呼びかけます。なお、注意報や警報の基準は地域によって異なります。
猛烈な雨を観測した場合、「記録的短時間大雨情報」が発表されることがあります。なお、情報の基準は地域によって異なります。
- 注3 この表は主に近年発生した被害の事例から作成したものです。今後新しい事例が得られたり、表現など実状と合わなくなった場合には内容を変更することがあります。